慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「会計史」の成立
Sub Title	The formation of "accounting history"
Author	友岡, 賛(Tomooka, Susumu)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2015
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.58, No.1 (2015. 4) ,p.1- 13
JaLC DOI	
Abstract	わが国における「会計史」の生成・成立について思量する。
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20150400-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第58巻第１号
2015 年 4 月

2015年３月18日掲載承認

「会計史」の成立

友　岡　　賛

＜要　　約＞
わが国における「会計史」の生成・成立について思量する。

＜キーワード＞
会計，会計学（説）史，会計学（説）史学史，会計史，会計史学史，会計通史，教科書，体系的な通史，通史，簿記，簿記史

「会計史」という学問領域の生成・成立については，既発表の論攷等[1)]において，あらまし以下のように捉えてきた。

「会計史」という学問領域の認知度は1970年代に俄かに高まりをみた。

その一つの証左は1979年に刊行が開始された叢書，『体系近代会計学』において，同年12月に上梓された第６巻が以下のような構成の『会計史および会計学史』とされたことである。

第１章　簿記会計史研究の発展
第２章　わが国における簿記会計史研究
第３章　イタリア会計史
第４章　オランダ会計史
第５章　フランス会計史

＜引用について＞
原文における太文字表記や圏点やルビの類いはこれを省略した。したがって，引用文におけるこの類いのものはすべて筆者（友岡）による。

1)　友岡賛「「会計史」小史」『三田商学研究』第51巻第６号，2009年。
友岡賛「会計史の論点」『三田商学研究』第54巻第３号，2011年。
友岡賛『会計学原理』2012年。

第６章　ドイツ会計史
第７章　イギリス会計史
第８章　アメリカ会計史
第９章　日本会計史
第10章　勘定学説史

この叢書は会計学書の出版においては大手の書肆，中央経済社の創立30周年記念の出版物であって，この手の叢書はそれ以前にも創立20周年における『近代会計学大系』（1968年刊行開始）および創立10周年における『体系近代会計学』（1959年刊行開始）が刊行されているが，この二つの叢書には歴史を扱った巻は設けられていない。したがって，「会計史」について，1960年代以前にはなかった状況が1970年代にはあった，としてこれを捉えることができようし，次いで1980年代に入り，叙上の『会計史および会計学史』の上梓からおよそ２年半後の1982年６月にはこの領域の学会，日本会計史学会が設立をみることとなるが，この『会計史および会計学史』の編者は「体系近代会計学に，今回初めて，第六巻として，「会計史および会計学史」の一巻が加えられた。従来から，簿記・会計の歴史的研究の必要性は，識者達の間では充分に認められていたのにもかかわらず，実務的必要性が少なかったために，一般的には，余り注目をひくには至らなかった[2]」としつつ，また，「欧米諸国に比すると，わが国では，簿記・会計史の研究者は比較的に多く，かつ着実に立派な諸成果をあげていられることは，世界の学界に対しても，大いに誇りとするに至ることである[3]」と自讃している。

さらに，通史に着目して「会計史」の変遷を辿った場合，2000年代に「会計史」の学術的な確立をみることができる。

ここに通史に着目するのは，「会計史」に限らず，およそ歴史というものには，まずは①大摑みの通史（的なもの）が書かれ，その後，本格的な歴史研究へと深化し，そこでは②細分化された対象における緻密な歴史が書かれ，その後，本格的な研究の蓄積を踏まえ，③体系性をもった通史が書かれる，といった過程がみられるからであり，また，③については「会計史研究の蓄積は会計通史を生み出すに至る。……これは会計史という分野が１つの学問体系を確立し，市民権を獲得したことを意味している[4]」ともされ，すなわち，○○史研究の蓄積は○○通史を生み出し，これは○○史という学問領域の確立を意味しており，「会計史」の③はその登場を2000年代にみることができる。

会計通史の成立

さて，その2000年代に相次いで刊行をみたのは次の２書だった。

2）小島男佐夫（責任編集）『体系近代会計学 Ⅵ 会計史および会計学史』1979年，「序文」１頁。
3）同上，「序文」１頁。
4）平林喜博（編著）『近代会計成立史』2005年，(1)頁。

平林喜博（編著）『近代会計成立史』2005年
渡邉泉『歴史から学ぶ会計』2008年

以下のような構成の『近代会計成立史』は，編著者によれば，「会計通史のテキスト[5]」とされ，また，「テキストとはいえ，多少とも難しい内容のものになっているかもしれない[6]」とされているが，そこで示される「会計史研究の蓄積は会計通史を生み出すに至る。つまり会計史の教科書の誕生である[7]」との理解は興味深い。

プロローグ　会計史の意義
第Ⅰ部　複式簿記の誕生とその漸次的普及（13世紀～19世紀）
　第１章　複式簿記の誕生とパチョーリ簿記論――イタリア簿記史
　第２章　フッガー家の会計と複式簿記の伝播――ドイツ簿記史
　第３章　商人国家の台頭とステフィン――ネーデルラント簿記史
　第４章　ルイ14世商事王令とサヴァリー――フランス簿記史
　第５章　産業革命期における損益計算の展開――イギリス簿記史
　第６章　パートナーシップの簿記と巨大株式会社企業の会計――企業形態の変遷にみるアメリカ会計史
　第７章　日本の伝統簿記と洋式簿記の導入――日本簿記史
第Ⅱ部　株式会社制度の普及と企業会計（19世紀末～20世紀前半）
　第８章　企業集団の形成と連結財務諸表
　第９章　無形資産の認識と資本会計
　第10章　工業化社会と管理会計
　第12章　株式会社制度と会計監査
第Ⅲ部　近代会計学の確立
　第13章　シュマーレンバッハと動的会計理論の系譜――ドイツ会計学説史
　第14章　リトルトンと取得原価主義会計の系譜――アメリカ会計学説史
エピローグ　会計史研究の歩み

また，以下のような構成の『歴史から学ぶ会計』は「本書の目的は，このような会計がいつ頃誕生し，時の移り変わりに伴って，その姿をどのように変えてきたのか。その結果，今日の会計が果たしている役割が本来の役割と乖離していないかを歴史というフィルターを通して見ていくことにある[8]」とされているが，ここには「乖離してしまっている」という著者の強い問題意識が

5）同上，(1)頁。
6）同上，(1)頁。
7）同上，(1)頁。
8）渡邉泉『歴史から学ぶ会計』2008年，ⅱ頁。

看取される。

序章　会計を学ぶ必要性
第１章　複式簿記の誕生
第２章　複式簿記の完成
第３章　損益計算思考の展開
第４章　イギリス簿記書に見る資産評価の変遷
第５章　産業革命以前のイギリスの簿記書
第６章　キャッシュ・フローの計算書の登場
第７章　貸借対照表の生成
第８章　会計への進化

ただし，如上の『歴史から学ぶ会計』については改訂増補版ともいうべき次の書が６年後に刊行されている。

渡邉泉『会計の歴史探訪――過去から未来へのメッセージ』2014年

第１章　複式簿記の誕生
第２章　複式簿記の完成
第３章　損益計算に対する二つの考え方
第４章　世界最初の簿記書『スンマ』(1494)
第５章　イタリアからオランダへ，そしてイギリスへ
第６章　産業革命期のイギリスの簿記書
第７章　18－19世紀イギリスにおける新たな潮流――複式簿記と単式簿記
第８章　簿記から会計へ
第９章　財務諸表の生成
第10章　キャッシュ・フロー計算書の登場
第11章　現代会計の落とし穴
第12章　彷徨する現代会計

書名こそ一新されているが，「『歴史から学ぶ会計』の新版ともいえる[9)]」とされ，『歴史から学ぶ会計』のそれと似通った以上のような構成のこの書には，叙上のように『歴史から学ぶ会計』に看取された著者の強い問題意識が明示されている。すなわち，「偏った考え方や一切の先入観を排し，過去に生じた出来事を可能な限り客観的に忠実に再現するのがわれわれ歴史家の仕事で

9)　渡邉泉『会計の歴史探訪――過去から未来へのメッセージ』2014年，308頁。

あり，目指すところでもある[10]」とする著者は，しかしながら，他方，次のように述べている。「本書は，会計ならびのその利益計算構造を800年にもわたり延々と支え続けてきた複式簿記が今日の行き過ぎた有用性アプローチのもとで，その本来の姿が大きく変容せしめられてしまった状況を明らかにし，その結果，今日の会計が果たしている役割が本来の役割と乖離してしまったのではないかといった思いを中心に，歴史の視点から投げかけたつもりである[11]」。

叙上のように『歴史から学ぶ会計』の行間に筆者が感じ取った「乖離してしまっている」がここには明示されており，しかしまた，「思いを中心に」述べられるこの書は「偏った考え方や一切の先入観を排し，過去に生じた出来事を可能な限り客観的に忠実に再現する」ものといえようか。

会計史学史の成立

ところで，前出の『近代会計成立史』に関してはこの書が会計史学史について論じている点が注目される。

すなわち，「近代会計学の確立」と題する第Ⅲ部を有するこの書は「会計史研究の歩み」と題するエピローグにおいて編著者が「会計史研究の歩みについて述べるということは……会計史学史を述べるということ[12]」のはずながら，「会計学（説）史学史を述べるということになってしまう。つまり，会計史学史が会計学（説）史学史にすり替わるのである[13]」と指摘し，その理由として「会計史研究は……会計史の面と会計学（説）史の面とが峻別されずに，いわば渾然一体となって存在して[14]」おり，しかも「会計学（説）史の分類に入る研究成果は圧倒的に多い[15]」ということを挙げている。また，こうした会計史と会計学（説）史の異同の問題について編著者は，かのルカ・パチョーリの『スムマ（算術，幾何，比，および比例全書）』（1494年）を引き合いに出して，この数学書を会計史の対象とすることに疑念を示し，『スムマ』は「学術書の範疇に入る[16]」ことから，これは，会計史ではなく，会計学（説）史の対象として捉えるべきと主張している[17]。

けだし，会計という行為の歴史としての会計史と，会計という行為を対象とする学問（会計学）の歴史であるところの会計学史について，この両者を峻別することの重要性は，むろん，これを否定すべくもないが，他方，会計行為と会計学の間には相互に影響し合う関係があることも考えれば，会計の歴史としての広義の会計史は会計学史を包摂するものとして捉えることもできようし，また，『スムマ』に複式簿記の解説が収められたという15世紀の史実はこれを狭義の会計史の対象とすることも自然ないし当然ではないだろうか。

10）同上，iii頁。
11）同上，308頁。
12）同上，227頁。
13）同上，229頁。
14）同上，229頁。
15）同上，229頁。
16）同上，7頁。
17）同上，7頁。

閑話休題。『近代会計成立史』のエピローグ「会計史研究の歩み」は，叙上のように，会計史学史を書くことの難しさを指摘しつつ，従前のこの手の書としては1969年に刊行された茂木虎雄の『近代会計成立史論』を評価している[18]が，その他，この「会計史研究の歩み」に類似の会計史学史としては前出の1979年刊の『会計史および会計学史』に第１章「簿記会計史研究の発展」と第２章「わが国における簿記会計史研究」があり，また，日本会計研究学会による近代会計百周年記念事業[19]の一環として編まれた1988年刊の『現代会計学の動向〔Ｉ〕　財務会計』は第９章を「会計史」としている。

他方，叙上の記念事業としては1973年に「会計文献・資料目録の作成・刊行[20]」が企画され，1978年刊の『近代会計百年』に収録されたその「文献目録」の分類項目には「会計史」はない[21]が，「本書は，近代会計制度百周年記念事業委員会編の文献目録と，相互に補完する機能を有している[22]」として1981年に刊行された『会計学文献目録』には「会計史」の分類項目をみることができる。

しかしながら，如上の1980年前後の状況を起点として，会計史に言及する文献を索りつつ，ときを遡ると，1950年代の次の文献が目に留まる。

黒澤清（編）『会計学の学び方』1957年

『学び方』という書名をもって初学者向きの入門手引書の類いと思いきや，「会計学研究の総合的指導書として[23]」編まれたというこの書は「会計学的研究の全範囲をもらすところなく網羅することにつとめ……会計学に関する研究の全部門を包括し[24]」，以下のような「会計史および会計学史」の部を有する構成となっており，しかも，『学び方』（研究の仕方）を述べる書であることから，先行研究の紹介も少なくなく，「会計史および会計学史」の部は会計史学史の文献としても捉えられるものとなっている。

18）　同上，229頁。

19）　福澤諭吉（訳）『帳合之法　初編』とA. シャンド『銀行簿記精法』が刊行された1873年から100周年の1973年に，これを記念して始められた事業。

なお，当初は「近代会計制度百周年記念事業」と称され，「近代会計制度百周年記念事業委員会」と称される委員会をもって行われた（日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会（編）『近代会計百年』1978年，「序言」１～３頁）この事業は，しかし，その後，なぜか，「近代会計百周年記念事業」と称され，該委員会も「近代会計百周年記念事業委員会」と称されるようになり（黒澤清，染谷恭次郎，若杉明（編）『現代会計学の動向〔Ｉ〕　財務会計』1988年，「序言」１～４頁），また，日本会計研究学会の年表においては1973年の欄に「近代会計百年記念事業委員会」と記載されている（日本会計研究学会50年史編集委員会（編）『日本会計研究学会50年史』1987年，140頁）。

20）　日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会（編）『近代会計百年』413頁。

21）　同上，280頁。

22）　染谷恭次郎（編）『会計学文献目録――明治・大正・昭和前期』1981年，「編者のことば」１頁。

23）　黒澤清（編）『会計学の学び方』1957年，「序文」１頁。

24）　同上，１頁。

総論（章立ては省略）
簿記（同上）
財務諸表（同上）
原価計算（同上）
会計監査（同上）
会計史および会計学史
　第１章　会計史研究の方法と意義
　第２章　複式簿記の生成と発達
　第３章　企業会計の発展
　第４章　会計監査の発達
　第５章　会計学説の展開
企業会計法（章立ては省略）
税務会計（同上）

会計史学史の存在は，或る意味においては，会計史が既に成立をみていることを意味しようが，確かにこの「会計史および会計学史」は会計史を概観しつつ，相当数の会計史文献を紹介しており，また，そのなかには「わが国の学者の手になる会計通史の独立の文献は，比較的少数であって，次の二著をあげうるにとどまる[25]」とされる国弘員人の『企業経理の発達』（1947年）と山下勝治の『新経営経済学大系　第６巻　損益計算論――損益計算制度の発展』（1950年）をはじめとする「決して少なくない[26]」わが国の会計史文献をみることができる。

ただしまた，直上に引いた件（くだり）は，これを中途で切らずに引けば，「わが国の学者の手になる会計通史の独立の文献は，比較的少数であって，次の二著をあげうるにとどまるが，会計学に関する著述の一部として書かれているもの，あるいは，複式簿記の発展に関するものは，後述するように決して少なくない[27]」であり，その後，この「会計史および会計学史」は（翻訳書以外の書籍では）例えば木村和三郎『日本における簿記会計学の発展』（1950年），田中藤一郎『複式簿記発展史論』（1950年），江村稔『複式簿記生成発達史論』（1953年），木村和三郎『会計学研究』（1954年）などを紹介しているが[28]，はたして会計史と簿記史は何をもって峻別するのか[29]。

なお，叙上のように会計通史の先駆とされた山下の『損益計算論』は，「組織的な損益計算制度の成立を複式簿記の成立に求め[30]」，「損益計算制度は，その拠つて立つ経済的基盤としての企業経済活動の態容，それをとりまく経済的諸条件の発展に即応しつゝ，自己順応の形態をとりな

25）江村稔「会計史および会計学史」黒澤清（編）『会計学の学び方』1957年，432頁。
26）同上，432頁。
27）同上，432頁。
28）同上，433～467頁。
29）友岡賛「簿記と会計」『三田商学研究』第57巻第６号，2015年。
30）山下勝治『新経営経済学大系　第６巻　損益計算論――損益計算制度の発展』1950年，「序」２頁。

がら自己を否定し，新な形態へと発展し，然も，常にヨリ精密な形態へと発展する傾向を辿るものである[31]」とする「立場から，複式簿記の成立と共にみられる損益計算制度諸形態の発展を具体的に考証しながら，損益計算制度発展の傾向理論を抽象しようとすることを企図[32]」しており，その「序」は次のように説き起こしている。

> 「文字が備忘の手段として発達したやうに，組織的な勘定記録法による簿記方法は，当初，商人の対外信用取引のメモラムダムとして，十三世紀初頭頃，イタリアの商業都市に初めてみられるものである。その原始的な簿記方法が漸次改良されつゝ，十四世紀中葉には，複式簿記としての原初形態を採り，遂に，十五世紀に至つて組織的な複式簿記の形態を備へるに至つてゐる。それは，一人の天才商人の発見したものでもなく，一つの時代の発見でもない。反つて，商人の実際的必要にかられ，その取引形態乃至商業形態の実際に即応しつゝ，次第に，組織的な方法へと発展を遂げるに至つたものである。中世イタリアの商業都市にその萌芽がみられ，然も，商業貿易の繁栄を極めたヴェニス地方に於て，それが完成をみるに至つてゐる所以である[33]」。

閑話休題。他方，如上の「会計史および会計学史」はその第５章「会計学説の展開」が会計学史について次のように述べている。

> 「経済学では，今日，経済学史という独立の分野が確立されており，古今の経済学説が一貫した脈絡をたどって説明され，その比較研究が行われるにいたっている。会計学でも，これと同じような立場から，会計学史という独立の部門が区別されても，決して不思議ではないし，また，そのような研究が行われることは，きわめて望ましいことであるといえるであろう。しかしながら，会計学説の発展を中心的にとりあつかっている文献の数は，本書において説明された種々のテーマとは異なって，非常に少なく，極端にいえば，皆無にちかいといっても過言ではない。この事実は，どのような理由にもとづくのであろうか。たしかに，経済ないし経済現象と経済学説の関係と，会計ないし会計実務と会計学説の関係は，多少ちがう性格をもっていることが認められよう。すなわち，経済現象は経済学における説明の有無にかかわらず，古くから存していたのであり，経済学説は経済現象を成立あるいは指導する役割をもつものではなく，経済現象に一貫する法則性を発見し，これを体系化することを目的とするものであった。ところが，会計学説は，多くの場合，会計実務の統一的法則性の解明のみにとどまらず，会計実務を指導するほどの勢力をも有していたし，また，そのような任務を与えられつつ，発展したものであった。この意味において，会計学説の発展は，会計の歴史をたどることによっても，いくぶんかは達成できるの

31）　同上，「序」３頁。
32）　同上，「序」３頁。
33）　同上，「序」１頁。

であり，また，そのような考察の手がかりは，すでに第四章までに与えてきたところであった。しかしながら，会計実務の発達が，ある程度まで高度の発達をとげるにいたれば，以上の関係は，もはや完全には認められなくなり，むしろ，会計学説が独自の発展をとげてゆくこととならざるをえないであろう。今日の会計学説は，すでにそのような転換期を経過したのであり，会計学史に独自の学問的重要性を与えて，会計学の独立の一分野として取扱うべき充分の根拠が認められるのである。しかしながら，体系的な会計学説史が書かれるためには，現在はその好機であるとはいえないかも知れない。今日まで発表されてきた多くの会計学説，そして，現在発表されつつある会計学説は，それぞれ，将来において大成さるべき会計学史の一ページにおさめられるべきものにすぎないのである。われわれは，いま，会計学説の発展と展開の中にいる。この「会計史および会計学史」の部分において，わずかに一章をもって，会計学史を説明しようとしたのは，そのためであり，また，本章で解説もしくは引用する文献の数が，必ずしも充分でないのも，その理由にもとづく[34]」。

ここでは「会計学説の発展を中心的にとりあつかっている文献の数は……非常に少なく，極端にいえば，皆無にちかいといっても過言ではない」とされているが，これは前出の『近代会計成立史』のエピローグ「会計史研究の歩み」における「会計史研究は……会計史の面と会計学（説）史の面とが峻別されずに，いわば渾然一体となって存在して」おり，しかも「会計学（説）史の分類に入る研究成果は圧倒的に多い」とする理解とは正反対であり，注目に値しよう。1957年から2005年までの約半世紀間に状況が一変したということだろうか。あるいは，両者に捉え方の異同があるのだろうか。「渾然一体」であることは同様ながら，かつては会計学史が会計史に埋没していたために「会計学説の発展は，会計の歴史をたどることによっても，いくぶんかは達成できる」とされ，方今は会計史が会計学史に埋没しているために「会計史学史が会計学（説）史学史にすり替わる」のだろうか。

また，この「会計史および会計学史」は会計史の会計学との関係について「会計史が会計学の一分野として研究されなくてはならないということは，きわめて当然のことのように思えるかもしれないが，会計史研究の場合，それが会計理論を確立する基礎的作業として行われなければならないということは，充分に強調されなければならないであろう。しかし，この場合にも，問題の整理の仕方に，いくつかの異なったタイプが指摘できる。その第一は，すでに歴史的資料となっている過去の会計学文献を詳細に検討し，そのなかから，当時の会計学説を把握しようとする立場であって，たとえば，一四九四年に出版されたルカ・パチョーロ（Luca Paciolo）の『簿記論』……から，その簿記学説を知ろうとする研究態度などは，これに属する[35]」とし，他方，「企業会計の実務は，単に技術的進歩によって発達してゆくものではなく，一定の理論によって大きく指導されるものである。このことは，複式簿記が一応の発展段階に到達したのち，特に明確に

34）　同上，478～480頁。
35）　同上，438～439頁。

みとめることができるであろう。ルカ・パチョーロの著述が会計実務におよぼした影響は，まさに，それであった[36]」としている。

なお，如上の『会計学の学び方』は後年，編者を替えて以下のような構成の新たな版が刊行されているが，旧版と比べると，章立てにおける会計史の扱いはかなり小さい。

染谷恭次郎（編）『会計学の学び方』1971年

序章　会計学へのアプローチ（節立ては省略）
第Ⅰ章　会計学の基礎
　第１節　会計の生成・発展と会計学（説）の展開
　　１．歴史を学ぶ意義
　　２．会計史
　　３．会計学（説）史
　第２節　会計の職能と機能
　第３節　会計公準
　第４節　会計主体論
　第５節　会計原則
第Ⅱ章　損益計算論（節立ては省略）
第Ⅲ章　資産会計論（同上）
第Ⅳ章　持分会計論（同上）
第Ⅴ章　財務諸表論（同上）
第Ⅵ章　会計監査論（同上）
第Ⅶ章　原価計算論（同上）
第Ⅷ章　管理会計論（同上）
第Ⅸ章　会計組織論（同上）

体系的な通史とは？

冒頭に言及された叢書はその後，約30年にわたって後続がなかったが，2011年には『体系現代会計学』の刊行が開始され，これにおいては翌年４月に上梓された次の書が会計史に充てられている。

千葉準一，中野常男（責任編集）『体系現代会計学［第８巻］　会計と会計学の歴史』2012年

36）　同上，457頁。

序章　「会計」の起源とわが国における会計史研究の展開と課題
第Ⅰ部　近代会計前史
第１章　複式簿記の生成・発展と「パチョーリ簿記論」への展開
第２章　複式簿記の伝播と近代化――オランダ，イギリスを中心に
第３章　株式会社の誕生と株式会社会計の起源――オランダ東インド会社とイギリス東インド会社を中心にした初期の株式会社の会計実務
第Ⅱ部　近代会計の黎明
第４章　株式会社会計における財務報告の源流
第５章　会社法制の萌芽と株式会社会計――ドイツの会社定款と株式会社会計実務
第６章　株式会社と会計専門職業の形成――イギリスの近代株式会社制度と会計専門職業人の台頭
第７章　近代会計理論の生成――19世紀英米会計文献に見る資本主理論生成過程の点描
第Ⅲ部　近代会計の展開
第８章　ビッグ・ビジネスの台頭と大規模株式会社の会計――アメリカの企業合同運動期の会計事情を中心に
第９章　会計原則の制定と取得原価主義会計の確立――アメリカにおける会計原則制定運動と取得原価主義会計の確立過程を中心に
第10章　意思決定有用性アプローチの確立と概念フレームワークの形成――アメリカにおける会計規制の観点から
第Ⅳ部　日本における会計の発展
第11章　三菱簿記法制定以前の三菱の会計――三菱・日本郵船の会計発展の源流
第12章　日本の会計基準と企業会計体制

以上のような構成のこの『会計と会計学の歴史』は，編者によれば，「本書は，会計の通史的叙述を目的とするものではない。通史を念頭に置きつつ，わが国における会計史研究の現状をふまえて，個々の章で取り上げるテーマが選択され，基本的骨格が構成されている。本書の前身的存在ともいうべき小島男佐夫（編著）『会計史および会計学史』……と比較すれば，本書の構成上の特徴は明らかになろう。『会計史および会計学史』が同書刊行当時におけるわが国の会計史研究の動向を反映して，もっぱら簿記（特に複式簿記）の歴史に焦点を定めていたのに対して，本書は，簿記の歴史とともに，これを含むより広範な会計の歴史を叙述することを目指している[37]」とされており，ここでも，はたして会計史と簿記史は何をもって峻別するのか[38]，と問いたいが，ただし，『会計史および会計学史』の編者は1979年当時の「わが国における会計史研究[39]」

37）千葉準一，中野常男（責任編集）『体系現代会計学［第８巻］ 会計と会計学の歴史』2012年，iii～iv頁。
38）友岡「簿記と会計」。
39）中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』2014年，(3)頁。

について「研究分野もイタリアを中心とした，いわゆる複式簿記の起源論，または発生史研究から，今や欧州諸国における，それぞれの国固有の簿記法の研究から，イタリア式貸借簿記法の流布・展開の問題の解明に進んでいる[40]」としている。

また，直上に引いたように「会計の通史的叙述を目的とするものではない」とされた『会計と会計学の歴史』の刊行（2012年）からさほどのときを置かずに刊行された次の書はこの『会計と会計学の歴史』と同じ編者をもって編まれた点も注目される。

中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』2014年

序章　「会計」の起源と複式簿記の誕生
第Ⅰ部　簿記の時代――複式簿記の伝播と近代化
第１章　フランスの簿記事情と会計規定の成立・展開――イタリア式簿記の導入以前からナポレオン商法まで
第２章　ドイツ式簿記とイタリア式簿記――フッガー家の会計制度と16～19世紀のドイツ簿記書
第３章　ネーデルラント会計史の現代的意義――ステヴィンの「簿記論」とオランダ東インド会社
第４章　15～19世紀イギリスの簿記事情――複式簿記の伝播とその漸次的普及
第５章　アメリカへの複式簿記の移入と簿記理論の体系化――理論的教示，そして会計学への展開
第６章　和式帳合と複式簿記の輸入――江戸時代から明治時代にかけて
第Ⅱ部　簿記から会計へ――株式会社と近代会計の形成
第７章　株式会社会計の起源――イギリス東インド会社と南海会社
第８章　株式会社制度確立期の財務報告実務――19世紀イギリスにおける鉄道会社の会計実務
第９章　株式会社と管理会計の生成――鉄道業から製造業へ
第10章　株式会社と会計専門職業――19世紀イギリスにおける会社法制の整備と会計専門職業の発展
第11章　政府・自治体と公会計――アメリカ公会計の起源と特徴
第12章　会計理論の生成と展開――世紀転換期から1920年代のアメリカにおける学説史的展開
結章　現代会計へのプロローグ

以上のような構成のこの書は，「わが国における会計史研究の状況[41]」について「会計の通史を

40）小島『会計史および会計学史』「序文」１頁。
41）中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』2014年，(3)頁。

体系的に論じた著作となると，その数は少ない。近年の事例を取り上げても，小島男佐夫……の『会計史入門』（1987）や平林喜博……編著の『近代会計成立史』（2005）などを挙げるのみである[42]」とする編者によれば，「本書は，このような状況をふまえて企画された[43]」とされており，しからば，体系的な会計通史が目指されたのだろうか。

文　献

千葉準一，中野常男（責任編集）『体系現代会計学［第８巻］　会計と会計学の歴史』中央経済社，2012年。
江村稔「会計史および会計学史」黒澤清（編）『会計学の学び方』白桃書房，1957年。
平林喜博（編著）『近代会計成立史』同文舘出版，2005年。
小島男佐夫（責任編集）『体系近代会計学 Ⅵ 会計史および会計学史』中央経済社，1979年。
黒澤清（編）『会計学の学び方』白桃書房，1957年。
黒澤清，染谷恭次郎，若杉明（編）『現代会計学の動向〔Ⅰ〕 財務会計』中央経済社，1988年。
中野常男，清水泰洋（編著）『近代会計史入門』同文舘出版，2014年。
日本会計研究学会近代会計制度百周年記念事業委員会（編）『近代会計百年』日本会計研究学会，1978年。
日本会計研究学会50年史編集委員会（編）『日本会計研究学会50年史』日本会計研究学会，1987年。
染谷恭次郎（編）『会計学文献目録――明治・大正・昭和前期』中央経済社，1981年。
友岡賛「「会計史」小史」『三田商学研究』第51巻第６号，2009年。
友岡賛「会計史の論点」『三田商学研究』第54巻第３号，2011年。
友岡賛『会計学原理』税務経理協会，2012年。
友岡賛「簿記と会計」『三田商学研究』第57巻第６号，2015年。
渡邉泉『歴史から学ぶ会計』同文舘出版，2008年。
渡邉泉『会計の歴史探訪――過去から未来へのメッセージ』同文舘出版，2014年。
山下勝治『新経営経済学大系　第６巻　損益計算論――損益計算制度の発展』泉文堂，1950年。

2015年３月17日成稿

42）　同上，(3)～(4)頁。
43）　同上，(4)頁。